

本発表の目的は、何らかの超越論哲学を形成する際に、そこに不可避的には入りこむ「生物学主義」の「追い払えなさ」を明らかにすることにある。この「追い払えなさ」は、そもそもわれわれが、たんなる進化した動物としての生を送っているにもかかわらず、自分の生、自分が生きる環境、自分を取りまく自然を、「言語」をもって記述せざるをえない矛盾に由来する。この問題は、論者が専門とするフランス現代哲学において、多種多様な問題系を突きつけてきているものである。ここではこの問題にかんして、ハイデガーの議論とそれを批判的に追求するデリダの論述、そして最後にアガンベンの議論をとりあげ検討していきたい。

ハイデガーが『存在と時間』を執筆する際に、人間学や心理学などとともに「生物学主義」に対し、自らの議論がこれらと混同されることを慎重に避けていたのは周知のことである。しかしながら、『存在と時間』刊行から程ない講義『形而上学の根本諸概念』において、ハイデガーは独自の動物論を展開している。それは、ユクスキュル環境世界論という『存在と時間』にもつながるような議論の枠を越え、ポイテンディーク、ドリューシュ、ベアや発生生物学にも及ぶものであり、生への本格的な考察が加えられているともいえる。もちろんこの議論の基本的なテーゼは、石には世界がなく、動物は世界貧困的であり、人間は世界形成的であるというものであり、そこでもハイデガーは「開顕性」*Offenbarkeit* をもった人間を特権視することには間違いがない。しかしここで動物論を取って展開し、形而上学を思考する上での通路にしていることも確かなのである。どうしてなのか。

他方デリダも、初期には現象学の内面的な批判から自らの哲学を開始し、その議論は記号や言語にこだわりつつけるものであった。しかしながらデリダは表面上、九〇年代以降、動物や動物性という主題を明示化していくことになる。デリダ最後の講義録である『獣と主権者 I・II』や、死後出版されたスリジー・ラ・サル「自伝的動物」での講演原稿『動物を追う、故に私は(動物)である』はその明確な表れであるが、そもそも「人間の終焉＝目的」をみすえていたデリダは、そのはるか以前から、動物とその生自身を問題にしていた部分がある。しかもその際にデリダは、執拗にハイデガーのテキストからみいだせる生物学主義との関連を掘り起こしていくのである。

その事例としては、*Geschlecht* と名指された一連の論考(分散して出版物に所収されている)や、著作『精神について』で、ハイデガーの『存在と時間』の現存在には *Geschlecht* が(性がない)ことを問題視したり、ドイツ語の *Geschlecht* がもつ、性、類、人種、血統、民族などを、手や耳といったテーマを設けつつ、政治的含意をこめて追求したりすること、また著作『アポリア』で、死という観点から、動物は「生が尽きる」だけであり「死ぬ」のは人間のみであるというハイデガーの主張を批判的に論じていることなどがあげられる。これらの議論は多岐にわたり、込み入った構造をなしているものの、いずれにしてもハイデガー自身が、生物学主義を避けながらも動物を本格的にあつかわざるを得なくなり、なおかつそこでの議論がはらむ問題点をひきたててくるものとなっている。『動物を追う』につながるこれらの議論は、記号や言語の探究からはじめ、超越論的哲学を乗り越えて宙づりにするデリダ自身が、途中より動物やその生を自らの存在に重ねてあつかわざるをえなくなることを示している。デリダはこれらにおいて、ハイデガーの『根本諸概念』を軸とする動物論に、自らの思考の影をみいだそうとしているかのようでもある。最後にアガンベンの『開かれ』——これも『根本諸概念』を詳細に分析する書物である——をあつかうのは、そのテキストが、ミツバチにおける行動のとりわれ＝朦朧とは『根本諸概念』のキータームである「退屈」に近いとするハイデガーの言説をめぐり、ハイデガーはそれらを同一視することを否定しはするものの、この近さは「何を意味するのか」を問うものであり、デリダの路線を延長した先にある議論と考えられるからである。

これを検討することで、ハイデガーから「生の超越論的哲学」という一見すると奇妙な可能性をとりださうのではないか。それは生物学主義を退けつつも、しかしどこかで生物学主義やそれに触発された生の哲学を内にはらみながらしか、哲学の「言葉」は語れないこと

を示すだろう。そのことは、ハイデガーとデリダという関係性を越え、現代哲学の領域におおきな問いかけを投げかけるはずである。